
おじさんと、おじいさんの冒険

天地 袋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじさんと、おじいさんの冒険

【Nコード】

N1662D

【作者名】

天地 袋

【あらすじ】

僕はもう若くない。おじさんだ。僕にとってのおじさん、世間ではおじいさんと一緒に、行き着いた先に待っていたものは！？

（前書き）

ごめんなさい。眠たい勢いだけで。つくりました。
おやすみなさい。

「おじさん、そろそろ目的地ですよ。」

私は持っていたタバコをそつと排水溝に落として、たまっていた水分をほんの少し気体に変えた。

「ああ、わかつとるわい。」

おじさんと言われた男は、カツと目を見開いてこちらをにらむ。

男は、僕にとつてはおじさんだが、僕がおじさんだから、世間で言うおじいさんだ。

こんな夜更けにおじさんと、おじいさんが何をしているのか疑問に思うだろうが、僕自身、疑問である。

だが、そんなことはどうでもいい。

とりあえず僕は夜間ゴミだし禁止にもかかわらず、出されているゴミを本気で蹴り上げた。

自慢ではないが、僕のキック力を持てれば、幼稚園児程度ならひとたまりも無いだろう。

ゴミは目の前の民家の庭先に、着陸を成功させた。

「ふふ…。まだ、甘いのか…。わしゃ、ホットケーキがくいたいわい。」

ああ、このジジイはもうだめだな。

僕は、冷やかな視線をおじいさんに投げかけたが、そこは熟年の人生冒険者だからであろうか、まったく空気を讀んだ行動をしてく

れない。

パツ！

今の擬音は、ゴミが入った民家の電気がついた音だ。

「まいったな、見つかったかな？」

「なに、甘いのう…。見つからないのが任務。つまり死人にくちなしじゃよ。」

おじいさんからのヒントは、つまりこうだ。

見つかりたくなければ、踊るしかない。

だが、この方法をとっていいのであるうか、夜中に、おじさんとおじいさんが踊り明かしては、間違いなく通報される。

このまま、家主に謝れば、謝罪ですむかもしれない。

一瞬の沈黙の後、おじいさんの口元がゆがんだ。

「よく耐えたな。常人なら3秒で発狂していただろう。常にわしがパルサンを炊いていたからのう…。」

ああ、このジジイは本当にダメなんだな。

そう思った刹那、向かいの民家から、時速3ノットという僕の中で体感速度で、竹箒が飛んできた。

すんでのところで、ソレをかわしたにも拘らず最近痛み出した腰が悲鳴をあげた。

「こんなところで、発症するなんて…。」

僕は呼吸を整えながら、視界の隅で民家を確認する。

筋肉隆々。雲おも貫かんとおぼしき巨漢が、門のところにとっついていないか。

「甘いのか…。見つかってしまうとは…。」
と人事のように話すジジイも、しっかりとみつまっている。

はたして、手負いの僕と、生命的に手負いのおじいさんで勝てるだろうか。

いや、おじいさんを当てにしてはだめだ。

ここは、若い僕が倒さなければ。

「何時だと思っている…。」
巨漢が静かに口をひらいた。

「ふおっふおっふお…。すみませんのか…。わし等は、旅に生き、自然を愛しむ、精神安定剤売りにございます。今日は、ここいらでスイカ泥棒を見かけましてな。もしよかったら、500円程度貸していただけませんか？」

やめろ、ジジイ。これ以上挑発しても、ハンバーガーさえ食べなくなるだけだ。

「おい、男。おじいさんに指一本触れてみる、俺が死んでもお前の家族を殺すぞ。」

僕がおじいさんを守るんだ。

「何いってんだ？お前達…。痛い目みるとわかるのか？」

「ふおっふおっ…。甘いの…。わしゃ、今年で96じゃ。」

その言葉を合図に、僕は地面を蹴った。身軽ではないが、重力にはなんとか逆らえるようだ。

男の拳を、よけて。右ストレートだ。

痛い。クソ！避けなかったか。ならば、こちらから仕掛ける。水面蹴りだ！

ギヤア！！クソ！！足を踏まれた！！

ならば、ん？、あれ…？まっすぐ立てないな…。

「フィニッシュだな。俺の拳を2発耐えるなんて。一般人レベルだな。大したものだ。」

男が、とどめをさす為に振り上げた拳を、竹箒が制した。

「ふおっふお…。若い者は宝じゃよ…。その芽を潰してはいかんのう…。」

おじいさんだ。

歪んだ視界のなかで、おじいさんが竹箒を構えて対峙している。

「ジジイ。先に殺されたいのか？」

「馬鹿を言っなよ？あっはっは！殺す！？君が？僕を！？」

あれ？おじいさん、口調違うくない？

「いいだろう見せてやるよ。96年の奇跡。真空後光剣をな…。」
言っが早いか、おじいさんは精神を集中させ、竹箒に力をこめて、一気に竹箒を真っ二つにした。

なるほど、100歳を前にして、なおもご健在だ。

竹箒の折れ端を、男に投げつけ視界を封じるとおじいさんは男のわき腹に、ひじ打ちをいれる。

しかし、男はそのまま、腕を振り下ろした。

残っていた、折れ端でそれを受け止めたとき、男の骨の碎ける音がした。

その刹那、おじいさんの体が光に包まれ閃光とともに静寂は訪れた。僕の周りには閑静な住宅街が広がっている。

そこには、男もおじいさんもいなかった。

「ありがとう。おじいさん。僕は、僕に残された時間を、精一杯生きるよ。たとえソレが、10年先、1年先、明日であっても。」

これは、後日分かったことであるが、パチカン市国の地下で太古の生物兵器が発掘された。

それは、1000年もの間、眠りについていたが、確実に生きていた。

現在、法王の力が巨大化し世界を脅かす存在になりつつある。

この発掘は、それに拍車をかけるであろう。

それを、僕はトーストをかじりながら見た新聞で知った。

(後書き)

ごめんなさい。早く忘れて、寝ましょう。
おやすみなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1662d/>

おじさんと、おじいさんの冒険

2010年10月27日13時56分発行